

◆論説

禅公案の英訳は 公案の工夫を深めるか —「本来の面目」の場合—

堀 心鑑

禅語や禅の公案を英訳すると予測しなかったような問題、とくに日本語と英語の違いによるさまざまな問題が浮かび上がってきます。このような問題は禅公案の工夫を深めることに役立つのでしょうか。あるいは単に翻訳上の問題だけで、公案の工夫とは一切関係ないのでしょうか。本稿では、私たちが最初に授けられる公案「父母未生以前に於ける、本来の面目如何？」の英訳を例に取りながら、「禅公案の英訳は公案の工夫を深めるか」という問題を考えてみたいと思います。

「父母未生以前に於ける、本来の面目如何？」という公案は、みなさんご存知のように、初心の者に与えられる公案です。かの夏目漱石も円覚寺の釈宗演老師から授けられ熱心に参禅した公案です。彼の参禅弃道の体験は、小説『門』の中で扱われています。主人公宗助は鎌倉へ出かけ参禅をしますが、結局見性することができず帰宅します。

「彼は門の下に立ち竦んで、日の暮れるのを待つべき不幸な人であった」（『門』）。この「父母未生以前」の公案は、『門』だけでなく、『吾輩は猫である』や『行人』にも見られます。善悪、美醜、優劣などの相対的なものの考え方から自己を見るのではなく、各人が本来備えている真実の自己を直^{じか}づけに捉え、体験させようという公案です。

この公案の英訳に伴う問題点の一つは時制、つまり時間的に過去か、

現在か、未来か、いつのことを尋ねているのかという問題です。文字通りに解釈すれば、「父母未生以前」ですので、両親が生まれる以前の事を問うているのですから論理的に判断すれば過去形にしなければなりません。したがって、英語では過去形に翻訳することになります。

しかし、禅の公案は「己事究明」の手立てであると言われ、哲学や思想ではなく、いつでも今、ここにいる己の一大事つまり、自己の在り方、今の真実の姿を把得せしめるための手段です。確かに質問の仕方は過去を問うような内容ですが、今ここにいる己を時間的な経過という縦の線と空間的にここに存在しているという横の線が交わった「今、ここ」の自己を問うています。したがって、今の自己を問うていると考えれば時制は現在形でなければなりません。それでは「父母未生以前に於ける、本来面目如何？」の日本語（あるいは中国語）の時制は何でしょうか。現在形でしょうか、過去形でしょうか。

この公案の時制を考える前に、松尾芭蕉の俳句、「古池やかわず飛び込む水の音」の英訳を考えてみましょう。みなさんはこの俳句は、過去のことを詠んだ俳句と解釈されますか、現在のことを詠んだ俳句と思われますか。著名な文学者や学者によって「古池や蛙飛び込む水の音」が英訳された例を100以上収集した佐藤紘彰の *One Hundred Frogs: From Renga to Haiku to English* (1983) という本があります。その中の英訳を考えてみましょう。

先ず、過去形で訳された例を見てみます。

Old pond-frogs jumped in-sound of water

これは西洋人で最も早くこの俳句を訳したラフカディオ・ハーン (Lafcadio Hearn) (1850~1904) の英訳です。ハーンの英訳は過去形です。過去形のほかに興味深いのは、ハーンは冠詞を使っていません。目に見える物は英語では数えられるものが一般的です。したがって、

「古池」は英語としては、不冠詞や定冠詞を伴い、an old pondやthe old pondとするのが正しい英訳です。しかし、ハーンは不定冠詞や定冠詞を使わずold pondとしています。さらに興味深いのは、蛙は1匹でなく、frogsとハーンは訳し、2匹以上を表す複数形にしています。私が調べた限りでは蛙を複数形にしているのはハーンただ一人です。みなさんはこの「蛙」を何匹だと思われますか。

時制の問題に戻りましょう。ハーンはfrogs jumped inと過去形に訳しましたが、過去形に訳した西洋人はハーンだけではありません。1950年代にアメリカを中心として現れ、物質文明を否定し、既成の社会生活から脱しようとした若者たちに支持された、ビート（Beat）派の代表的な詩人でヒンズー教や禅に影響を受けたアレン・ギンズバーグ（Allen Ginsberg）（1926～1997）も過去形で訳しています。次の例を見てください。

The old pond
A frog jumped in,
Kerplunk!

過去形で訳していますが、ハーンと違う点は、冠詞を使い、蛙は単数としています。他の翻訳者と異なる点は「水の音」を擬声語Kerplunk!を使った点です。

日本人にも過去形で訳している人物がいます。英文の名著*Bushido*を書いた新渡戸稲造（1862～1933）です。次の例をご覧ください。

Into an old pond
A frog took a sudden plunge,
Then is heard a splash

新渡戸は蛙の飛び込む行為は過去形で訳していますが、その音の認識は現在形を使っています。他の翻訳者とは異なり、飛び込みを表す動詞はjumpやleapなどの自動詞を使わないで名詞構文を使い、蛙が跳び込む様を動的な行為としてとらえることを避けているように思われます。これは「水の音」にあたる箇所を受身形の使用にもみられます。この俳句を動的ではなく静的な情景として訳出しようとしたのかもしれませんが。

過去形を使った他の日本人に、英語で詩集を出版し、日本より海外で評価された詩人で、W.B.イェーツ (W. B. Yeats) とも親交があった野口米次郎(1875~1947)がいます。

The old pond!
A frog leapt into-
List, the water sound!

野口は、芭蕉の原文にない語、list「聴け！」を挿入しています。しかも、一般的な動詞listenではなく、古語としての英語listを使っています。「聴き給え！」という呼びかけ、つまり「水の音」に対する積極的な注意の喚起は、新渡戸の翻訳で使った表現is heardと対照的です。動詞heardとlistenの違いは、heardは意識しないで「聞こえてくる」場合、listenは意識的に耳をすまして「聴く」場合に使います。野口は「聴け！」と訳し、新渡戸は「聞こえてくる」と訳しています。

これまで、過去形で訳した翻訳を見てきましたが、この俳句の翻訳において最も多い時制は現在形です。次の翻訳をご覧ください。

The quite pond
A frog leaps in,
The sound of the water.

これは川端康成の『雪国』を英訳し、その名訳ゆえに、川端はノーベル賞を受賞することができたと言われるエドワード・サイデンステッカー (Edward G. Seidensticker) (1921~2007) の訳です。

現在完了形で訳した例もあります。

The old pond!

A frog has plunged-

The splash! (Asataro Miyamori)

また、現在進行形を用いた例も見られます。

The old pond, yes, and

A frog is jumping into

The water' s noise. (G. S. Fraser)

興味深いのは時制を明示しない例です。日本人で最初に英訳した正岡子規 (1867~1902) は時制を曖昧にしています。

The old mere!

A frog jumping in

The sound of water

時制を訳出しないで、文法的に破格なやり方で時制だけでなく単複の問題を避けようとした訳者もいます。松尾芭蕉の俳句を英訳した *The Bamboo Broom* (1933) や英語俳句の入門書 *Haiku in English* (1965) を書いたハロルド・ヘンダーソン (Harold G. Henderson) (1889~1974) です。

Old pond:

frog jump-in

water-sound

この翻訳で使われている単語jump-inはヘンダーソンがこの俳句の英訳のために作りだした動詞と言えます。この動詞は現在形のように見えますが、現在形であればjump-insと三人称現在のsを付けなければなりません。さらに、このjump-inは動詞ではなく名詞の可能性もあります。冠詞を省略し単複も明示していないので時制や相や数詞の概念を越えた、あるいはそのような概念以前の世界を訳出しているようにさえ思えます。

一体、松尾芭蕉は蛙が古池に飛びこむどの瞬間を俳句に詠んだのでしょうか。飛び込む直前か。飛び込んだ瞬間か。飛び込んだ後か。この俳句を絵画にすると蛙はどこに描かれるのでしょうか。

このように「古池や」の俳句ひとつにもこれだけの様々な時制の英訳があり、それぞれ異なった翻訳者の解釈の違いが見られます。

では日本語では「古池や」の俳句の時制はどのように解釈されているのでしょうか。たとえば、中学生用に作成された国語教科書の副読本『国語便覧』（1997: 76）では次のように解説されています。「どんよりとした古池に、突然蛙がとびこんで、静寂が破られた。しかし、古池はまもなくその音をのみこみ、もとの静寂にかえっていく。」この解説文の中の「静寂が破られた」という表現は英語の時制としては現在完了形と過去形に解釈されるでしょう。山本健吉（1955: 103-109）をはじめ批評家の中には、過度の禅的な解釈は受け入れないものの、芭蕉の禅的な影響を認め、瞬間性、つまり「開眼」の瞬間を詠んだものとして解釈しています。瞬間性を表す時制は、英語では現在形よりも現在完了形が近いでしょう。

また、日本を代表する俳人の1人である、朝日俳壇選者の長谷川權(2005: 46-49)は、この句は「古池に蛙が飛び込んで水の音がした」という意味ではなく、「蛙が飛びこむ音を聞いて心の中に古池の幻が浮かんだ」という句である、という解釈を別々の箇所、現在形、過去形、現在完了形の現代語訳で説明しています。英訳ほどではないにしても、「古池や」の俳句の日本語の時制の解釈も限定するのは難しく曖昧だと言えます。

それでは、「父母未生以前に於ける、本来の面目如何？」の公案の英訳に戻りましょう。まず、過去形で訳した例を見てみましょう。

曹溪庵佐々木指月老師は過去形で訳しています。指月老師のことはみなさんご存知のように、立田英山老師とは法の上では兄弟関係にあります。指月老師の師家は、英山老師と同じ釈宗活老師です。1893年にシカゴで開催された世界宗教者会議で、鎌倉円覚寺の管長であった釈宗演老師は日本人として初めて禅仏教について講演した後、法嗣ほつすの宗活老師をアメリカに派遣しました。その時指月老師も宗活老師に随伴し、その後再度アメリカに渡り、指月老師は、1930年にニューヨークで最初の禅センターを設立しました。そこでは定期的に提唱を英語で行っていました。「父母未生以前に於ける、本来の面目」の公案は次のように訳されました。

Before father and mother, what were you? (Hotz, 2002: 175)

この英訳に関して、時制以外で興味深いのは「父母未生」の英訳です。冠詞も所有代名詞もなく、“Before father and mother”と訳されている点です。日本語では「父母」という場合、だれの「父母」であるかを明示しなくても文脈で判断しますが、英語の場合は明示しなければなりません。「あなたの父母」(“your father and mother”)のことか、「私の父母」(“my father and mother”)のことか、「一般的な父

母」(“a father and mother”)のことが、さらには「父母全般」(“the father and the mother”)を意味するのか、それによって英語は異なります。少なくとも冠詞や所有代名詞もない“father and mother”は英語としては不自然で通常は間違いです。指月老師は、文法的に破格である表現を使うことによって何を表現しようとしたのでしょうか。

時制の問題に戻りましょう。指月老師の弟子であり、アメリカで強制収容所に収容された指月老師を救出するために戸籍上は婚姻関係になり、老師の死後師の遺志を実現するため来日した佐々木ルースと釈宗演老師の法嗣の一人である三浦一舟(1965: 44)による英訳でも過去形で訳されています。

The Sixth Patriarch asked the head monk Myo: “Thinking neither of good nor of evil, at this very moment *what was your original aspect before your father and mother were born?*”

しかし、禪の公案はいつでも今、ここにいる己の一大事、つまり自己の在り方、真実の姿を把握せしめるための手段だとすると、質問の仕方は過去でも「今、ここ」の自己を問うていると考えることができます。したがって、時制は現在形でなければならない。そうになると英語の通常の文法からすると逸脱した表現となってしまうを得ません。しかし、論理的には父母以前の自己を問うているのであるから時制は過去形となるのも致し方ないのです。佐々木指月老師や三浦一舟、佐々木ルースのような過去形の英訳を批判できません。

もちろん、一般的には現在形で訳されることが多いように思います。代表的な訳として、鈴木大拙(1964: 104)の訳があります。大拙はこの公案を次のように訳しました。

“When your mind is not dwelling on the dualism of good and evil,

what is your original face before you were born?"

before以下が過去形なので、beforeの前が現在形というのは、英語の時制の一致の点からは奇妙な表現ですが、「今、ここ」を悟らしめるには現在形でなければなりません。

では、この「父母未生以前に於ける、本来の面目」の後に類則として与えられる「死後に於ける、本来の面目如何」という公案はどうでしょうか。「父母未生以前に於ける、本来の面目」の場合は表面的には過去を問いながら、今ここの自己を明諦に把得することが重要でした。「死後に於ける、本来の面目」では言葉の上では未来を問う体裁になっています。論理的な面からすれば未来時制を使わなければなりません。しかし、未来時制を使うと死後も何か靈魂のようなものが存在するような誤解を招きます。禅では靈魂の存在を認めません。これは、将来の死を前にした最期の瞬間の心構えを問うているのではなく、今ここの自己の有様が問題ではないでしょうか。今が生であり死であるこの瞬間をどう処理するか。この「死後に於ける、本来の面目」の公案は「父母未生以前に於ける、本来の面目」の場合と同じように過去から未来際まで一貫して変わらない本来の自己が通底していることを冷暖自知させようとしています。したがって、現在形として表現することが好ましいと考えることができます。

しかしながら、「父母未生以前に於ける、本来の面目」の時制も、「死後に於ける、本来の面目」の時制も、綿々と継続され、そして永遠に継続していく本来の面目は、過去、現在、未来という時間の流れを越えている。時間というものを無視しているわけではない。過去にもあったし現在もあり未来にもある。あるいは、有るとか無いとかいう事もない自己の真実。どこまでが過去で、どこが現在で、どこから未来であるかという区別も意識もない。従って厳密に言えば本来の面目を問う時制はないとも考えられます。日本語でも中国語でも時制は

どれかに限定することはできません。これは言語の特徴の問題だけではないかもしれません。

本稿では「禅公案の英訳は公案の工夫を深めるか」という問題提起のもと、「本来の面目」の公案の英訳について考察してきました。主に時制に焦点を当てて英訳を比較検討してきましたが、日本語と英語の違いによる異文化翻訳の問題点が浮き彫りになったように思います。時制以外にも、語彙、代名詞、文法、文構造などの面からも禅公案の英訳の難しさが見られます。このような問題点は、禅の世界をこれまでとは違った視点からとらえ直すきっかけを与えてくれるでしょう。とくに、公案の工夫を深めるのに役立つのではないかと思います。みなさんはどうようにお考えになりますか。

参考文献

- Blyth, R.H. (1966) *Mumonkan: The Zen Masterpiece*. The Hokuseido Press.
- Cleary, Thomas (translated) (1993) *Unlocking: The Zen Koan*. North Atlantic Books.
- Cleary, Thomas and J. C. Cleary (translated) (1977) *The Blue Cliff Record*. Shambhala.
- 福島慶道 (1994) 『禅は無の宗教』 柏樹社.
- 芳賀幸四郎 (1996) 『新版一行物：禅語の茶掛』 (上・下) 淡交社.
- 芳賀徹編 (2000) 『翻訳と日本文化』 山川出版社.
- Harding, Douglas (2002) *On Having No Head: Zen and the Rediscovery of the Obvious*. Inner Directions Pub.
- 長谷川權 (2005) 『古池に蛙は飛びこんだか』 花神社.
- 北條文緒 (2004) 『翻訳と異文化：原作との<ずれ>が語るもの』 みすず書房.
- 堀正広 (2001, 2002) 「ニューヨークの禅者：曹溪庵佐々木指月：海

を渡った放浪の禅者」(1)、(2)、(3)『禅』4号、5号、6号、人間禅出版。

Hotz, Michael (ed.) (2002) *Holding the Lotus to the Rock: The Autobiography of Sokei-an, America's First Zen Master*. Four Walls Eight Windows.

稲垣久雄 (1991) 『和英禅語グロサリー』永田文昌堂。

國廣哲彌編集 (1980) 『日英語比較講座 第2巻 文法』大修館書店。

McPhail, Mark (1996) *Zen in the Art of Rhetoric: An Inquiry into Coherence*. State University of New York Press.

Miura, Isshu and Ruth Fuller Sasaki (1965) *The Zen Koan: Its History and Use in Rinzai Zen*. Harcourt Brace.

Reps, Paul (compiled) (1957) *Zen Flesh, Zen Bones*. A Pelican Book.

李御寧 (1993) 『蛙は古池に飛びこんだかー「俳句」と日本人の発想』学生社。

佐藤和夫 (1978) 『菜の花は移植できるか：比較文学的俳句論』桜楓社。

Sato Hiroaki, (1983) *One Hundred Frogs*. Weatherhill.

Sekida, Katsuki (1977) *Two Zen Classics*. Weatherhill.

Suzuki, D.T. (1961) *Essays in Zen Buddhism*. Grove Weidenfeld.

Suzuki, D.T. (1964) *An Introduction to Zen Buddhism*. Grove Weidenfeld.

Suzuki, D.T. (1972) *The Zen Doctrine of No Mind: The Significance of the Sutra of Hui-Neng*. Weiser Books.

山本健吉 (1955) 『芭蕉-その鑑賞と批評-』新潮社。

横井雄峯 (1991) 『日英禅語辞典』山喜房佛書林。

『国語便覧』(1997) 浜島書店。

■著者プロフィール



堀 心鑑（本名／正広）

熊本学園大学外国語学部教授、図書館長。博士（文学）。英語コーパス学会会長。

著書：*Investigating Dickens' Style: A Collocational Analysis*. (Palgrave Macmillan, U.K. 2004, 英語コーパス学会賞)、『英語コロケーション研究入門』（研究社、2009年）、『例題で学ぶ英語コロケーション』（研究社、2011年）など。昭和53年、人間禅荒木古幹老師に入門。現在、人間禅布教師。

